



広島市に原爆が投下されて8月6日で75年。県内の被爆者は高齢化で年々減少しています。

2020年8月6日付 大分合同新聞1面

被爆者の記憶風化懸念

広島市に原爆が投下されて6日で75年になる。大分県内の被爆者は長崎市と合わせて482人(3月末時点)。高齢化で年々減少しており、体験を語り継ぐ機会がなくなった。「戦争を一度と繰り返さぬよう、体験を伝えたい」。語り部たちは惨劇の記憶が風化しない、心を痛めている。

大分県原爆被害者団体協議会(県被団協)の永島三歳会長(79)は4歳の時に広島で被爆した。悲惨な体験を後世に伝える語り部の一人だ。1945年8月6日午前8時15分、爆心地から約2キロ離れた広島市南観音町の自宅近くに住んでいた。空襲警報が解除され、家の外で近所の友達と遊ぼうとしていた時だった。

左後方で閃光を感じ、振り返ると落下傘のような物が見えた。再び前を向いた直後、爆発音があった。「爆風が来たのだろうが覚えて



広島での被爆体験を語る県原爆被害者団体協議会の永島三歳会長(79日、臼杵市野津町)撮影・江藤成吾

県内、年々減る実体験の語り部

「命の限り伝えたい」

「突然、原爆を落とされ、人々は真っ黒焦げになって死んでいった。悲惨な戦争は絶対にしてはならない。依頼を受けるたび、小中学校などで平和への思いを訴え続けてきた。

県被団協は会員262人のうち、90歳以上が95人と高齢化が進む。乳幼児期に被爆した人は記憶がないこともあり、実体験を語る人は5人ほど。子どもたち2世の活動が期待されているが、表立つのをためらう人も多く、継承は進んでいないのが現状だ。

永島さんは大分市内の民間企業に就職し、その後、県の技術職として働いた。

白血病を発症するのではなにかという恐怖や、今も残るやけどの痕。周囲の視線に惨めな思いをしたこともあった。シャツやパンツは溶け、左腕や左胸を中心にやけどを負った。やがて黒い雨が降り始め、母親と一緒に家の中に避難してからは気を失った。終戦後は食糧事情の悪かった広島を離れ、母の叔父を頼って宮崎県に移り住んだ。

「命ある限り、語り続けたい」と奥城さん。生きたこととして戦争は終わっていない」と強調する。世界では大国が核兵器を保有し続けている。奥城さんは「日本は米国の核の傘に守られているが、唯一の被爆国として核廃絶にもっと努力すべきだ」と憤る。残された時間をどう生きるか。「命ある限り、語り続けたい」と奥城さん。生

き証人としての使命感が語り部たちを突き動かしている。(八坂啓佑)

大分県内の被爆者 県に被爆者健康手帳を持つ人は広島での被爆が25人、長崎が17人。平均年齢は84・83歳。データが残る中で最も古い2009年の112人と比べると、半以下になった。

① 記事を読んで文中の()に数字を入れてください。

大分県内の被爆者(被爆者健康手帳を持つ人)は広島での被爆が()人、長崎が()人の合わせて()人。平均年齢は()歳。データが残るうちで最も古い2002年の()人と比べると半以下になった。

②被爆体験を語る人たちが心を痛めているのはどんなことですか？

③小中学校などで平和への思いを訴え続けてきた県被団協の永島三歳会長は原爆や戦争について何と話していますか？

④世界では大国が核兵器を保有し続けています。長崎で被爆した奥城和海さんはこうした現状について何と話していますか？

⑤語り部たちを「命ある限り、語り続けたい」と突き動かしているものは何でしょう？